
真・恋姫無双―異世界の英雄と恋姫たちの三国志演義

フォン・スパーク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双―異世界の英雄と恋姫たちの三国志演義

【Nコード】

N3049H

【作者名】

フォン・スパーク

【あらすじ】

英雄クラウド達の時代より、600年後、クラウドの子孫、北郷一刀と謎の少年黒月零斗が、恋姫たちの世界で戦う話。一刀と零斗の戦いの行方は……

序章

俺は、北郷一刀。聖フランチェスカ学園の2年生だ。ある日、黒月零斗が転校してきた。零斗とはすぐに仲良くなった。しかし、零斗から衝撃の事実が明かされた。

「俺、セフィロスの血を受け継いでるんだ。お前が英雄クラウドの子孫なんだよな。なら・・・殺す！」

零斗は正宗を構え、斬りかかってきた。

「零斗、やめてくれ・・・俺たち親友だろ」

それでも、零斗はやめない。仕方なくこちらも攻撃をした。バスターソードが、何かに当たり、割れた音がした。

「チッ、異世界の扉が開いた…。一刀、あっちの世界で会おう。」

「あっちの世界って、どういう…」その瞬間、俺と、零斗は、光に包みこまれた。

序章（後書き）

初めての投稿です。これから頑張ります。

1話、天の御使いと3人の恋姫

「ここは……」一刀は、目を覚ました。見たことのない土地や、森が広がっている。「今、所持している物は、バスターソードに合体剣、雌雄一对の剣か。ほかは、携帯電話、マテリアか……」

一刀は、今持っているものを、確認した。

「これからどうす……ん？」

なにかが大きな物音を、立てて、こちらへ向かってきている。そこには、黄色の中を髪につけている人たちが、30名ほどが、こっちに向かってきた。

「ここが、異世界か……殺風景だな」

黒月零斗は、切り開かれた森の跡地で目覚めた。

誰かの気配がして、零斗は、後ろを振り向いた。そこには、白馬に乗り、大鎌を、腰につけた少女だった。零斗は、貴族の娘か、その一族だと思った。

と、そのとき、少女が、口を開いた。

「私は、この陳留の太守、曹操よ、字は、猛徳。この辺に、流星が降ってきたのだけれど、知らない？それより、この国じゃ見ない服ね。あなたの名は？」

「俺は、黒月零斗、字は無い。……この世界とは、別の世界からやってきた。」

「そう、なら私のもとに来ない？」

俺は、曹操と名乗った少女の後を追った。

一刀は、黄色の中を付けた、約30名ほどの人が、自分の前に立ちふさがったことで、何かを察した。

「おい、兄ちゃん、死にたくなかったら来ている服と、武器を置いてけ。そうしたら、なにもしねえ」

「そうだ、そうだ」

「言うことを聞けば、何にも、しないんだな」
ノッポ、チビ、デブの3人がそう言った。

「絶対無理」

俺は、そう言いながら、合体剣を構えて
斬りこんでいった。

「凶斬り、ブレイバー、破光撃！」

必殺技の名前を叫びながら、攻撃を食らわせ30名ほどの盗賊（？）を、倒した。そのとき、人3人の気配がした。

「見事な武ですね」

桃色の髪の女の子と、長い矛を持ってる女の子、綺麗な黒髪で迫力のある戟を持った女の子の3人が現れて、黒髪の女の子が、言った。
「君たちは？」

一刀が、そう答えると、彼女たちが自己紹介をした。

「我が名は関羽、字は雲長です」

「私は劉備だよ。字は玄德」

「鈴々は張飛、字は翼徳なのだ。」

彼女たちが、自己紹介をしたから、一刀もした。

「俺は、北郷一刀、関羽たちみたいに、字っていうのは、無い。」
これが、俺と劉備、関羽、張飛との出会だった。

1話、天の御使いと3人の恋姫（後書き）

2回目の投稿です。感想があれば、送って下さい

2話、義勇軍結成！4人の誓い

俺は、北郷一刀、英雄とうたわれたソルジャー、クラウドの子孫だ。ある日、俺が通っている学園、聖フランチエスカ学園に転校してきた銀髪の少年、黒月零斗。彼がこの学園に来てから、俺の運命の歯車が狂った。零斗は、ジェノヴァの息子であるセフィロスの血を、受け継いでいたんだ。彼が、俺を殺そうとして俺も、武器であるバスターソードを、構えて攻撃をしたら、何かが割れ、光に包みこまれた。

そのあと劉備、関羽、張飛と名乗った少女たちと出会った。そこで俺は、この世界のことを聞かされた。

「……であり、この世界は乱れています。どうか、私たちとともに世界を救ってください。天の御使い様」

「わかった。俺は天の御使いとしても、一個人としてもこの世界を救いたい」

「じゃあ、互いの真名を教えあわなきゃ、ね、愛紗、鈴々」

「そうですね、桃香様」

「鈴々も賛成なのだ、桃香お姉ちゃん」

「えっと真名って何？」

わからなかった一刀は3人に聞いた。

「真名は、男女ともにある本当の名前なんだよ。もしかして、あなたの世界では、無かったの？」

「まあね。じゃあ、真名を、教えてくれるかな」

「それでは……私の真名は、愛紗です」

「私は、桃香だよ。改めて、よろしくね」

「鈴々の真名は鈴々なのだ！」

「鈴々、それだとややこしくなるだろ！」

「愛紗、あまり怒るなよ。それより、改めて、俺は北郷一刀。俺には真名がないから好きに呼んでくれ」

「わかりました。ご主人様、ご指示を」

「それじゃ、義勇兵を集めよう」

一刀と愛紗と桃香と鈴々は、街を目指して歩いた。

一刀たちは、1000名ほどの義勇兵を集めた。戦があれば、愛紗と鈴々と一刀の武力と桃香の冷静な判断で連戦連勝だった。

戦い続きで3日の休暇を全兵に呼び掛け、一刀たちも休日を楽しく過ごすことにした。

「なあ、桃香、愛紗、鈴々……この近くに桃園っていう所があるんだけど、行かないか？」

「お兄ちゃん、お酒を持っていっても良い？」

「ああ、良いよ」

「ご主人様、用意ができたら、桃園に行こうよ」

俺たちは、桃園がどんな所かを話し合いながら、向かった。

俺たちは桃園について、驚きで声に出せないほど綺麗だった。

「雅だね」

「とても綺麗な桜ですね、ご主人様、桃香様」

「それじゃみなでお酒を飲むのだー！」

「鈴々！、お前という奴は！」

「愛紗、怒るなよ。それより俺から提案があるんだ。聞いてくれるか？」

「なんですか、ご主人様」

「早く聞きたいのだ」「そうだよ、ご主人様」

愛紗の後に、鈴々、そのあとに桃香が、一刀に聞いた。

「この4人で、義兄妹にならないか？」

この話を3人は「嬉しいです（のだ）」と言ってくれた。

「」「我ら、ここに誓う！」「」

「この4人、血がつながって無くとも、兄妹のように助け合い」

「この義を持って民を救うのだ」

「生まれた日は違えども、同じ日に死ぬことを望む」

「我ら、ここに兄妹の契りを結ぶ」

「」「天よ、我らの心に偽りがあり、誓いに背くなら、我ら4人を殺すが良い！」「」

こうして、4人の誓いは、成立した。

「俺たち、これからどうなるんだろう……」

「ご主人様、これからは、どんな時も一緒です」

「私たち、兄妹でしょ」

「お兄ちゃん、これからは、ずっと一緒なのだ……」

「そうだな、俺たちは、ずっと一緒だからな……」

一刀は、愛紗、桃香、鈴々と永遠に一緒に居たいという夢が、叶うような気がした。

2話、義勇軍結成！4人の誓い（後書き）

義勇軍の誕生の所が、適当でスミマセン……感想があれば、送って下さい。それと、オリキャラを出したいのですが、案があれば、名前と字、真名、どこの軍に所属させてほしいかを送ってきてください。それでは、次の投稿で逢いましょう。

3話、3軍共同戦線

「太守様、大変です！」

「どうしたんだ、そんなに慌てて」

幽州琢郡の太守の北郷一刀は急ぎながら部屋に入ってきた衛兵に訪ねた。

「青州の孔融將軍が黄巾党に襲われました」

「なんだとッ！」

一刀と孔融は、同盟を組んだ仲である。その孔融が、危機に陥っている。一刀はすぐに助けようとした。

「わかった。俺たち以外に孔融殿を支援する軍は？」

「公孫讃將軍率いる遼西軍と孫策將軍率いる呉軍です。徐州の陶謙將軍は、遠征で孔融將軍に援軍を送れません」

「よし、愛紗たちを呼んでくれ。軍議をする」

「ご主人様、今我が軍には10000弱の兵がいます。兵糧は、3ヶ月分があります」

愛紗が的確に説明してくれた。

「でも、これからは正確な判断が必要になるよ、ご主人様。敵も多いらしいよ」

「こんな時に臥竜・鳳雛がいればなあ」

「荊州の天才軍師ですね」

「でも、鈴々と愛紗とお兄ちゃんがいれば戦なんて簡単に終わるのだ」

「だけど、それだけじゃだ……」軍議中に失礼します「ん？なんだ」

「太守様に会いたい者がいます。どうしますか？」

「謁見の間で待ってくれと伝えてくれ」

「俺がこの琢郡の太守、北郷一刀だ。君たちの名前を覚えてくれるかな？」

「はい、私は荊州から来た徐庶、字は元直と言います」

「私の名前は諸葛亮、字は孔明でしゅ……」

「あわわわ……私は鳳統、字は士元でしゅ……」

一刀はなぜこんな女の子が士官したのが気になった。そのとき愛紗が、口を開いた。

「お主ら、なぜ荊州から来たのか気になるのだが、聞いても良いかな？」

と、愛紗が聞いて、徐庶が話してくれた。

「私たちは、水鏡先生という人の塾で勉強していました。しかしこの乱世の中で貴方様のことを知って貴方様とともにこの乱世を救いたいと思いました。しかし私は、非才の身です。だが、朱里と雛里なら私より軍師として有能でしょう。2人は臥竜と鳳雛と呼ばれています」

「ええええゝ2人が臥竜と鳳雛だつてゝ！」

「はい」

一刀は1度落ち着いて、あることをたずねた。

「徐庶、諸葛亮、鳳統、俺たちに力を貸してくれないか？皆で、世界を救うんだ。良いよな愛紗、桃香、鈴々」

「賛成です。臥竜と鳳雛の知恵や徐庶の働きで民たちが多く救われることに、なるでしょう」

「私も賛成だよ、ご主人様」

「鈴々も良いのだ」

「じゃあこれからよろしくな。それと真名を教えてくださいるかな？」

「私の真名は、蛍です。これからよろしくお願いします」

「私は、朱里です。非力ですが、お願いします」

「私は雛里です。……よろしくお願いします」

「我らも名乗りましょう。我が名は関羽、字は雲長。真名は愛紗だ。朱里、雛里、蛍、これからよろしくな」

「私は、劉備、字は玄徳だよ。真名は桃香っていうの。よろしくね」

「鈴々は張飛、字は翼徳なのだ。真名は鈴々なのだ」

「いきなりで悪いけど、これから遠征に行くから、兵と兵糧をすぐに用意してくれ」

「「はっ！」」

数日で青州に着いた北郷軍は陣を張り、一刀は愛紗と朱里と一緒に公孫讃と孫策に会いに行った。

「軍議に遅れて申し訳ない。俺は天の御使い、北郷一刀だ」

「私は一刀様の第一の矛。関羽と申す」

「はわわわ。わ、私は諸葛亮、字は孔明です。ご主人様の許で軍師をしています」

「よろしくね、天の御使い君に関羽と諸葛亮。私の名は、孫策よ。字は伯符」

「オレは公孫讃、字は伯珪だ。よろしくな北郷」

「我が名は趙雲、字は子龍と申す。公孫讃殿の許で客将をしている。以後、お見知りおきを」

「自己紹介も終わったことだし、軍議を始めよう」

3話、3軍共同戦線（後書き）

次回は、序盤が軍議、中盤と終盤は戦の予定です。

4話、黄巾党掃討戦

「黄巾党は10万もいるのか……」

「その中に首領の張角がいるらしいわ」

「情報はこれくらいか……兵の合計人数は？」

「我々呉の軍勢は6万よ」

「オレの遼西軍は3万弱だ」

圧倒的に孫策や公孫讃の軍勢は多い。それ故に統率がうまくいかない。それを調節している公孫讃と趙雲に孫策やその部下もすごいと一刀は思った。

「俺たちの軍は1万だ。数は劣っているが、力は同等だろう」

と、そこへ、呉の將軍と思われる2人がやってきた。一人は孫策と同じ髪の色をした少女、もう一人は薄い紫の髪をポニーテールでまとめて、腰に鈴をいくつか付けている少女だ。

「姉様、冥林がすぐに陣へ戻るようにと仰せです」

「わかったけど、軍議がまだだから遅くなると伝えて」

「わかりました。では」

「2人とも待ってくれるかな、これから一緒に戦うから名前だけ教えてくれるかな」

「私は孫権。字は仲某。孫伯符の妹です」

「私は甘寧。孫権様の補佐だ」

「よろしくな、孫権に甘寧」

そしたら、急に愛紗が一刀を呼んだ。

「ご主人様、物見が戻ってきました」

「よし、通してくれ」

「敵は、青州城付近で休息しています。それと人体活動できる時間が限界なので、身体を元に戻してくれ、主」

「わかった」

次の瞬間、周りを閃光が包み、光が消えた後、業火をまとった魔神

が現れた。

「「「「きゃあああああ!」」」」」

「あ、ごめん、皆は俺が魔術を使ったのを見たのが初めてだっけ…
…、イフリート、悪い思いさせたな……」

「大丈夫です主。こういうことには慣れていますから」
愛紗たちが恐怖で、立ち竦んでいた。

「ご、ご主人様、その魔物は……」

朱里が今にでも泣きそうな顔で一刀に訪ねた。

「こいつは、イフリート。俺が操る魔神の1体だ。イフリートは味
方には優しいから大丈夫だよ」

こうは言ったが、まだ怖いようだ。

「と、とにかく軍議はいったん終わろう」

「そうだな……」

「わかったわ。作戦はこちらで考えとくわ」
こうして軍議は終了した。

「ただいま」

「お帰りなさい、ご主人様……う、後ろの魔物？はなんですか……」
やはり桃香や蛍も驚いたようだ。ってゆうか皆に俺が魔術や召喚ができるのを教えるのを忘れてた……

「こいつはイフリート。炎を操る魔物だよ。俺は他にも魔物を召喚したり、この玉、マテリアを使って術を使うことができるんだ。ほかの魔物は後々に紹介するよ。それと今回の戦いはイフリートにも参加してもらう」

「わかりました。だがなぜ魔物を出すのですか？ 私たちの力があれば十分だと思います」

「そうなのだ。お兄ちゃんや愛紗、公孫譚のお姉ちゃんと孫策のお姉ちゃんがいれば完璧なのだ」

愛紗と鈴鈴がそう言ったが、桃香や朱里が反対した。

「私はご主人様がこの世界に降りたときに魔物が一緒に来たと思うの」

「ここは、私も桃香様と同じ意見です」

「朱里や桃香様がそういうなら……」

すると、突然慌ただしい走り音が聞こえた。

「伝令です。孫策様が作戦を決めたので、この位置に陣を置いて下さいとのことですよ」

孫策からの伝令から紙を渡され、そこに作戦と陣の位置が書かれていた。

「よし、この作戦どおりに陣を張れ！」

一刀たちが陣を張ってすぐに戦闘が始まった。北郷軍は正面から攻撃を開始する。

「チッ、邪魔だ！！画龍点睛！！」

「我也行こう。地獄の火炎！」

一刀とイフリートの攻撃で黄巾党がどんどんやられていく。

「ぐわああっ」

「た、助けて……」

一刀は死んでいく者の悲痛な声が耐えられなくなった。

「主、大丈夫か」

「ああ、心配はいらない。じゃあとっと終わらすか！」

「御意」

そのとき、一刀に青い何かが周りに出てきた。

「この一撃で終わらせる、『紅蓮の業火』！」

「すべてを破壊する」

一刀から純白の翼が生えた。

一刀を見ている黄巾党は白き翼の悪魔としか見ていなかった。

「死ね……『超究武神覇斬』！」

一刀は今の攻撃で10万の命を散らせた。孫策や公孫讃は恐れるしかなく、桃香や鈴鈴、朱里や雛里に螢はただ見てるだけだった。

だが、愛紗は違った。人の命を削りたくないと言っていた少年の姿は無く、愛紗が見ている一刀は血まみれの身体でいる白き翼の悪魔しか見えていなかった。

5話、魔物出現

黄巾党との戦闘が終わり、すぐに不幸は訪れた。

「なんだって！？魔物が現れただって！」

「はい。蒼い狼や緑のこうもりに翼を生やした鳥頭の獣が現れてます」

「俺もすぐに行く。それまでは何とか抑えてくれ」

そう伝えると伝令は去った。

「イフリート、魔物はガードハウンドとデスゲイズとグリフォンだと思う。だからオーディンも出す」

「御意」

一刀は地面に魔方陣を出現させ、詠唱を始めた。

「汝、大剣を携えし騎士よ。汝のその剣で魔を斬り裂け！いでよ、オーディン！！」

すると、魔方陣から巨大な馬に乗り、全身に甲冑をしている騎士が現れた。

「主よ、久しぶりだな」

「そうだな、オーディン。しかしここで再開を祝っている場合じゃねえぞ……魔物が出現した。魔物が出ると、厄介だ。俺たちの手ですべての魔物を消すんだ。行くぞ」

一刀は白い片翼を出して飛び出そうとした。しかしそれは彼女たちによって止められた。

「ご主人様、私たちも連れて行って下さい」

「そうだよ。私たちだって戦えるんだよ」

「お兄ちゃん、鈴々はお兄ちゃんを助けたいのだ」

愛紗、桃香、鈴々の順番に言った。でも一刀は妹たちを危険な目に遭わせたくなかった。

「だめだ、来る……」「ご主人様、行かせてあげて下さい」「朱里、雛里……」

「ご主人様、私たちは戦えません。なので、愛紗殿たちを連れていき、戦ってきてください」

「蚩、お前まで……」

一刀はチツと舌打ちをした。

「わかった。だけど1つだけ約束してくれ。絶対に死ぬなよ……」

「「はい！（うん！）」」

一刀は片翼を掲げ、皆とともに戦いに行った。

そのころ公孫讚や孫策は魔物と必至に戦っていた。しかし、どんなに魔物を倒しても数は減らない。

「どうなっている、もう3000体くらい倒したはずなのに……くそっ！北郷軍から援軍は来ないのか……」

「諦めるのはまだ早いわ」

「どうして……あ、あれは、北郷！」

公孫讚と孫策は空を見ると、イフリートと愛紗と桃香と鈴々を連れてきた天の御遣い・北郷一刀が背中白い片翼で羽ばたきながらやってきた。地上からは巨大な馬に乗った騎士、オーデインがきた。

「公孫讚、孫策、大丈夫か？ な、なにあの数。俺、モンスターは何体も倒したけれど、あんな数見たことない」

一刀はモンスターの数を見るなりそう言った。

「北郷、お前あんな数を相手にするのか！？」

「そうだけど、心配してるのか？」

「バ、バカか、そんなんじゃないって。ただお前1人であんな数倒せないと思うし……」

「大丈夫だよ」

「そうか。こちらの軍は大勢の兵士が負傷しているから一度撤退する。趙雲、殿を任せてもいいか？」

「良いですが、条件があります。撤退したら私を魔物と戦わせて下さい。北郷殿の力になれるかもしれません」

「わかった。北郷気をつけろよ」

そうして公孫讚の軍は撤退した。孫策の軍も撤退したようだ。

「よし、イフリートとオーデインと愛紗と鈴々は俺と一緒に戦ってくれ。桃香は逃げ遅れた兵士を誘導させて逃がしてくれ」

「ご主人様、私だって戦かえるよ」

「それはわかってる。でもこれができるのは桃香しかいないんだ」

「わかりました。ご主人様、無茶をしないでください」

「わかった。桃香も気をつけろよ」

「皆来るぞ。構えろ」

イフリートは術の詠唱を始め、オーデインと愛紗と鈴々はそれぞれの武器を構え、一刀は雌雄一对の双剣【雲龍】と【不知火】を抜き連結させて【蒼天】を左の手に、数多の剣を合体させた合体剣を右手に持ち、それぞれ構えた。そして戦いが始まった。

「グリフォンか…… へ大地よ、大いなる裁きを与えたまえ」 『クエイク！』

一刀が術の詠唱が終わると同時に地面が盛り上がりグリフォンへ攻撃をした。

「ギャアアアア！」

「ガハッ……くっ、『クライムハザード』！！」

一刀が放った連撃でも倒れなかったグリフォンに殺られると一刀は悟った。

（こんな所で死ねない……俺を待ってる奴がいるのに……朱里、雛里、蛍、鈴々、桃香、愛紗ごめんな……）

そう思った時だった。一刀の目の前でグリフォンが倒れた。倒したのは……

「ちょ、趙雲！？来てくれたのか」

「はい。丁度こちらに来了時、北郷殿が魔物にやられてるのを見ましてな、それで」

「助かった。ありがとう趙雲」

「ご主人様、大丈夫ですか？」

と、こちらに来了愛紗が声をかけてくれた。

「ああ、趙雲が助けてくれた」

「そうですか、趙雲、ありがとう」

「いや、当然のことをしたまでだ」

このとき、多数のモンスターが一刀たちに迫っていた。

「来たか。愛紗、趙雲と一緒に戦ってくれ。あいつは頼りになる」

「はい、わかりました。ご主人様、気をつけて下さい」

そう言って愛紗は趙雲共にモンスターの群れに向かった。

「俺も行くか……唸れ【蒼天】」

「流石に数が多い……『地獄の火炎』!!」

「これではきりがないな……『斬鉄剣【覇】』!!」

イフリートとオーディンは多数のモンスターと戦っていた。しかし想像よりもはるかに数を上回っていた。

「これではきりがない。イフリート、大丈夫ですか？」

「ああ、心配はいらない。しかし数が多すぎる。後1人いれば助かるのだが……『鈴々に任せるのだ!!』」その声は、張飛殿か

「鈴々で良いのだ。それより数が多いのだ」

「そうだな……突っ込むか」

「賛成なのだ」

「危険ですが、行きましょう」

こうして鈴々とイフリートとオーディンはモンスターへ突っ込んだ。

そのころ一刀は親玉と思われるモンスター3体と交戦していた。

「きりがないな……コピーリミットブレイク『アポカプリス』、『八刀一閃』!!」

一刀は即座に術の詠唱を始め、終わった瞬間、突然空に黒い雲が現れ、紫の稲妻がモンスターに直撃し、すぐに合体剣を腰のホルスターにしまつて【蒼天】を【雲龍】と【不知火】に分裂させ、8回の斬撃を食らわせた。3体の内、2体が消滅した。

「あとはグリフォンだけか……この世界から消えろ。これで終わらせる!!!」

一刀は合体剣を出してリミットブレイクの構えをした。

「いくぞ、リミットブレイク『超究武神覇斬ver5』!!」

その叫び声とともに合体剣に蒼いオーラが出現してオーラが放たれると同時に合体剣が分裂して、一刀がグリフォンを斬り上げ、それと同時に飛び空中で大剣と分裂した剣で何度も斬り裂き、剣を合体させて地上へ1撃で斬り落とした。

一刀と交戦してたモンスターが消えるとほかのモンスターも消えた。

「今回は助かったよ。ありがとう北郷」

「いや、別に大したことじゃないさ」

「そうか、また会えるといいな。我が軍は撤退する。準備を急げ」

「そうだ、愛紗、孫策は？」

「先ほど撤退しました」

「ならいい」

一刀と愛紗は陣へ戻り、撤退の準備を始めた。

5話、魔物出現（後書き）

一刀が使っていた武器、【雲龍】と【不知火】は機動戦士ガンダム00のMS、スサノオの武器から取りました。次回は休日パートの予定です。最初は朱里か愛紗にしたいと思います。それでは感想を送って下さい。オリキャラも応募しています。読者の皆様、ご協力をお願いします。

休日編・朱里パート（前書き）

オリキャラが一人決定しました。

それは史実で孔明と戦った司馬慰です。

設定は反董卓連合のときに書きます。

後、後書きの方に現在ででいる恋姫の皆さんと主人公の一刀と僕で対談っぽいのをやります。

では本編をどうぞご覧ください。

休日編・朱里パート

その日、一刀は朱里と一緒に政務をしていた。
(この世界の文字ってウータイと似てるな。ま、偶然だろう)
そう思いながら一刀は政務を続けた。

「朱里、こっちは終わったぞ」

「そうですか、私も今終わったので視察に行きましょう」
「そうだな」

街の視察は朱里と雛里が提案して皆が了承したので決まった。視察の当番は1週間ごとに変わる。今週は一刀と朱里が当番であった。

「ご主人様、今日はどこから見ますか？」

「そうだな……北から行くか。商人が来たらしいから、規則を守っているか確認するんだ」

「わかりました。では行きましょう」

一刀と朱里は城下街へと出て行った。この後起こる出来事も知らずに……。

「ご主人様、あそこに本屋があります。行きましょう！」

「わ、わかった」

一刀は朱里に散々付き合わされていた。何故かというと朱里がお菓子をおねだったり、今のようには本屋があると本が欲しいと一刀に頼み、ついつい買ってしまう。

（朱里、目的を忘れてるんじゃないのか？）

「キャアああアアア！？た、助けてえええええッ！」

何処かで女の人の叫び声がした。それは聞き覚えのある声だった。

「この声は、桃香様！？何でここに……」

「それより、朱里はここで街の人の避難を頼む。俺は、モンスターを倒しに行く」

「わかりました。無茶をしないでください」

「気をつけるよ。」

そのやり取りの後、一刀は桃香の声がした方へ行った。朱里は一刀を優しく見つめる。

モンスターは蒼い狼、ガードハウンドと全身紅い鎧に身を包んだ化け物、Gウォーリアが3体ずつが出現した。

「さて、モンスターは6体か。バスターソードはと……って！！無い。あるのは【雲龍】と【不知火】か、連結【蒼天】！」

一刀は【雲龍】と【不知火】を【蒼天】へすぐに連結させ、モンスターへ斬り込んだ。

「桃香、どこに居るんだッ！隠れているなら……」「ご主人様」桃香、無事だったか。戦えるなら蒼い狼を倒してくれ」

「はい」

「さて、行くか……『絶剣・連邪』！！」

一刀は素早い動きで敵を斬り裂く。桃香も靖王伝家でガードハウンドを斬る。

「あと1体へ雷鳴よ、その怒りを断罪の雷として轟け！サンダラ！一刀の周りにはモンスターはもういなかった。しかし、何かがおかしかった。それはGウォーリアが一体がいなかったからだ。

「なあ桃香、他のモンスターは？」

「さっき、あっちの方に飛んで行ったけど」

「あっちの方には朱里がいるってのに……桃香、お前は愛紗たちにこのことを報告しろ。俺は朱里を助けに行く。」

「わかった」

一刀は桃香と別れてさっき朱里と別れた方に行った。

（朱里、必ず助けるからな。あの時の過ちを繰り返さないために）

「街の皆さんは広場の方に避難してください。ここは兵士さんたちで食い止めます」

朱里がそう言った途端、街の人は、すぐさま逃げ出した。

「ぐあっ！」

「大丈夫ですか!？」

「しょ、諸葛亮様、は、早く逃げて下さい……」

兵士は気絶をした。

「兵士さん、しっかりしてください」

「グギヤああアアアっ!!」

朱里が後ろを振り向くと、Gウォーリアが朱里に向かって戟で殺そうとしている。

（私はここで死ぬの？でも死にたくない。まだ皆と一緒に居たい）
朱里が自分の死を悟った時だった。突然、目の前のモンスター倒れた。その後ろには

「ご主人様、なぜここに来たんですか？」

「そんな風に言うなよ。それより下がってろ。来る」

その瞬間、モンスターが一刀に斬りかかった。しかし、その攻撃を何のためらいもなく【蒼天】で止めた。

「すぐに終わらせるさ……リミットブレイク『画龍点睛』！！」

一刀の凄まじい攻撃でGウォーリアは倒れたと思われたが……

「ご主人様、後ろ！」

「なッ、ぐあああッ！……消えろ！！」

一刀は襲いかかってきたGウォーリアを倒したが意識が薄れていた。た。

「ん……んさ……じょう……」

（朱里の声だ。俺はどうなっていたんだろう）

朱里に呼ばれ、一刀は目を覚ました。

「良かった、ご主人様。私をかばった後気絶したんですよ。大丈夫ですか？」

「ああ、問題はない」

一刀と朱里は本やお菓子でお金を無駄使いたから愛紗に怒られて、使えるお金がお小遣い制になったのは別の話。

休日編・朱里パート（後書き）

作者「えーと、今回から始まりました。恋姫無双後書き対談（仮）です。最近料理で作れるレシピが増えた作者のフォン・スパークです」

一刀「この『ファイナルファンタジー7&真・恋姫無双―英雄一刀と恋姫達の三国志演義』の主人公の北郷一刀です」

作者「そして北郷軍陣営の恋姫です」

愛紗「ちよっと作者殿、今のひどい扱いの紹介の仕方は何なんですか!？」

鈴々「そうなのだ。愛紗はともかく、お兄ちゃんだけひいきしてずるいのだ」

愛紗「鈴々、今のは聞き捨てならんな」

作者「愛紗、目が笑ってないよ……」

一刀「そうですね」

今のは、愛紗には聞こえてません。

鈴々「ごめんなのだ、愛紗」

愛紗「鈴々、またぬかー!!」

朱里「作者さん、あの2人は置いといて、話題に入りましょう」

一刀&作者「軽く受け流したな。いろんな意味で怖い」

桃香「私から質問するね。作者さんは休日編以外で関連する物語は書くんですか？」

作者「はい。そりゃあ書きますよ。あと、休日編は物語と関連しない場合が多いです。愛紗編以外では。一刀の過去の物語を描く過去の記憶編を執筆しようと思います」

一刀「じゃあ俺からも質問。ずっと気になってたんだけど、メインヒロインはだれなのか教えて下さい」

作者「メインヒロインは愛紗です。物語の最後らへんで、結婚させます」

愛紗「本当ですか!?!」

作者「もちろんです。嘘はつきません」

桃香&朱里「愛紗ちゃん(さん)だけずるいですよ?」

作者「わかったから、桃香は靖王伝家を、朱里は分厚い本を今すぐしまつて」

しゅしゅ納得してくれた2人。

一刀「そういえば、雛里と螢は?」

作者「政務で忙しいから来れないらしいよ」

鈴々「作者のお兄ちゃんはどうしてペンネームがフォン・スパークなの?」

作者「それは機動戦士ガンダム00の外伝の機動戦士ガンダム00Fのキャラクターから取ったんだよ。ってもう時間がない!一刀と愛紗、次回予告お願い」

愛紗「司馬慰の真名が決まってるので応募します。あと、司馬慰の字が間違えてたら教えて下さい。それと、オリキャラを募集しています。ご協力をお願いします」

一刀「作者は8月2日から旅行に行くので、更新が遅くなります。ご了承ください」

作者「次回の休日編は鈴々パートの予定です」

一同「」「」「次回もお楽しみに」「」「」

休日編、鈴々パート（前書き）

今回は前後編あります。

理由は後書きで。

それでは本編をご覧ください。

休日編、鈴々パート

北郷一刀は城の闘議場で召喚術の練習をしていた。

「竜皇よ、その翼を広げ暗黒を滅せよ。そして覇竜帝へと進化せよ。復活せよ、バハムート・烈!!!」

一刀には召喚が成功したかに思えたが、失敗した。その理由は……。「また、封印を解けなかったか……。ごめんな、バハムート。俺はお前に本来の力を取り戻させたいだけなのに……」

「一刀、貴様はよくやってくれた。しかし、私は本来の力を取り戻さなくてもよい。あの時に犯した罪をまた犯してしまうかもしれないからな。一刀、貴様もそのことは承知の上で私の本来の力を取り戻させようと思ったのだろう」

「ああ、その通りだ。でも俺はお前の力を取り戻させてしまうと俺もあの罪をもう一度背負ってしまうかもしれない。今だってあの時の咎を背負ってるのに……。俺ってバカだよな……」

「もうその言葉は聞きたくない。私はもう消える」

バハムートが消えたのは一刀一人にさせたかったからだ。

「うっ、う……うわわああああああっ!!」

一刀は泣いた。自分の罪を少しでも忘れるために。そして、自分の犯した罪を戒めるために……。

「お……いちゃ……きて」

一刀は誰かに呼ばれて目を覚ました。

「お、鈴々か。どうしたんだ？」

「愛紗たちが御飯の支度ができたから呼んで来てって言われたのだ」

「そうか……。なあ鈴々、少しだけでいいから話を聞いてくれるか」

「いいのだ」

「じゃあ。黄巾賊と戦った時に俺は沢山の命を奪ったのは覚えているか？」

「うん、覚えてるのだ。でも怖かったのだ。でも皆の命を守るためにやったことだから仕方ないのだ」

「いいや、俺はそれ以前に罪を背負っているからな……」

「今からそのことを話してくれるの？」

「ああ。あれは十年くらい前のことだ……」

休日編、鈴々パート（後書き）

最後の通り、一刀の過去の一部が明かされます。

一刀が背負った罪とは？

次回は

「過去の記憶編、覇竜帝と少年の罪（タイトルは仮です。一応……）」

┐

の予定です。

次回もお楽しみに。

過去の記憶編、覇竜帝と少年の罪（前書き）

ここでは一刀の過去の一部が明かされます。

一人の背負った罪はとても重いと作者の僕でも感じました。
それではご覧ください。

過去の記憶編、覇竜帝と少年の罪

俺が小学校……知識を学ぶところに通ってた時だ。

「一刀、早く行こうよ。遅れたら半殺しナンダヨ〜!」

「落ち着けよ裕太。金子先生がそんなことするわけないだろ」

8歳の一刀と喋ってる少年、小林裕太と一緒に居た。2人は幼馴染でいつも一緒に居る。

「まずい、後五分で遅刻だ〜!」

「やばいぞ。裕太、急げ〜!」

「ま、間に合ったー」

「2人とも遅かったねー。いつもはもっと早いのに」

「俺たちが遅刻しそうになったのは裕太が寝坊したからだよ」

「お、僕じゃないよ。一刀だろ！」

「何だところ！」

「やるのかよ！」

「はいはい、2人ともストップ。先生が来ちゃうよ。それでも喧嘩したらどうなるかわかってるでしょうね!？」

「「はい、すみません」」

「わかればよし。早く座った方がいいよ」

一刀と裕太の喧嘩を止めたのは2人の幼馴染の佐野綾香だ。成績優秀で男勝りな子だった。

それから少し経ってからの休み時間の時だった。担任の金子先生が大慌てで教室に入ってきた。

「皆、大変だ……モンスターがこの学校を襲撃してきた！」

「なんだって!？」 「どうしよう……」 などの声が聞こえてきた。それが我慢できなくなった一刀は皆にこう言った。

「俺が時間を稼ぐから先生は皆を連れて逃げてくれ。俺は魔法や召喚術を使えるから大丈夫だから」

「でも、一刀が死んじゃうよ！」

「そうだよ。一緒に逃げようよ。速く！」

裕太と綾香が一刀に一緒に逃げようと説得をした。しかし、一刀は決して首を縦に振らなかった。

「俺が止めなきゃ誰が止めるんだよ。俺しかいないだろ。これは皆を守るためなんだ。頼む、早く行ってくれ」

「でも、一「わかったわよ。皆、早くここから逃げましょう」っておい！一刀はどうするんだよ！？」

「一刀なら大丈夫に決まっているじゃない。一刀、必ず帰ってきてね。帰ってこなかったらどうなるかわかってるでしょうね！？」

「ハイ、必ず帰ってきます」

「よろしい。絶対に死なないでね……」

その言葉を最後にクラスの皆は教室から出て行った。

「竜皇よ、その翼を広げ暗黒を滅せ。そして覇竜帝へと進化せよ。汝、我が許へ現れる。バハムート・烈！！」

バハムート・烈は純金の身体に背中の翼に6つのビームビットがある。そしてその威圧は竜皇としての威厳や風格がある。

一刀がバハムート・烈を召喚したと同時にモンスターの大军が押し寄せてきた。

「バハムート・烈、あの大軍を倒せるか？」

「あれくらいなら倒せる。何とかなるだろう」

「わかった。じゃあ、始めようぜ」

バハムート・烈は攻撃を始め、一刀はバハムート・烈の攻撃を魔法で援護した。

「光の裁きを受けるがいい、『光の審判』！！」

バハムート・烈が呪文を唱え終わった瞬間、すべてを飲み込むほどの閃光が走り、閃光が消えると、モンスターは3分の1が葬られた。

「俺もやるぞ、『グラビガ』！」

上空に巨大な重力球が現れて当たりのモンスターを飲み込んだ。重力球が消えた後、飲み込まれたモンスターは葬られなかったものの、増大なダメージを喰らった。

「まだいるのか。『六牙天降』！！」

「貫け、『エナジー』！！」

バハムート・烈が翼のビームビットを飛ばしてモンスターに落として爆発させる。追い打ちに一刀が放った光の弾がモンスターに貫通して何度もダメージを与える。

「まだ減らないのか。バハムート・烈、あれやるぞ」

「だめだ。あれは危険すぎるし、周りに被害が及ぶ。お前がそれで

よいなら我は貴様に従うまでだ」

「よし、モンスター共、死んでもらう。やれ、バハムート烈！！
『エクサフレア』！！！！」

一刀の指示とともにバハムート・烈が上空に飛び立ち、翼を大きく広げながら急停止する。翼からビットをすべて射出して狙いを定めるようにモンスターたちを上から囲む。そして力強く翼を広げ、両翼にエネルギーを集める。翼に集まるエネルギーは強大なものになり、その巨大なエネルギーを口に集中させる。臨界までエネルギーをためるとビットに強大なブレスを発射する。ブレスはビットに当たるとそのまますぐに地上のモンスターに当たり、巨大な爆発が起きる。

爆発がおさまると、そこにはモンスターの死体が沢山あった。見られないほど残酷な光景だった。その近くに一刀が最も見たくない光景があった。それは……

モンスターに殺された人やエクサフレアの爆発に巻き込まれた人たちの遺体があった。そこには幼馴染の裕太と綾香の姿もあった。

「おい、綾香、裕太、死んでないなら目を覚ましてよ!？」

「か、一刀……良かった、無事だっ……たんだ……」

裕太はかろうじて生きてた。しかし今すぐ死んでもおかしくない状態だった。

「裕太……良かった。生きてたんだ」

「いや……もう僕はダメみたい。ゴメンね。一刀……僕の方まで生きて……ね。絶対……だ……よ……」

「裕太!! 死ぬな! 死なないでよ……」

裕太は死んだ。一刀はそれを受け入れた。

「綾香、綾香、大丈夫!？」

「一刀、やっぱり無事……げほっげほっ!？」

「綾香、血反吐はいてる……おい、綾香!？」

「一刀、私、もう死んじゃうみたい」

「え……」

「最後に……これだけは伝えとくよ」

「え、何？」

「……大好きだよ」

「綾香……俺も好きだよ」

一刀は綾香を抱きしめた。綾香の身体はもう冷たくなっていた。

「綾香まで……クソッ俺は何も守れないのかよッ!？」

「お前、あれだけの人とモンスターを1人で殺したのか？」

「え……」

「化け物め!出てけ!」 「ここから消えろ!」 「お前なんか死ん

「じゃえ！」

そんな暴言を一刀1人に言われた。

（俺はただ……皆を守りたかっただけなのに……）

この事件の後、一刀は『滅龍人』として化け物として扱われ、恐れられた。

「なあ、バハムート、俺は罪を犯したんだよな」

「ああ」

「俺はもう咎人なんだよな」

「ああ」

「クソッ……裕太、綾香、守れなくてごめんな……うつ……うつ、うわああああああっ!!」

それは悲痛な叫びだった。一刀はあの事件の後、己を『ヒト』じゃなくて『咎人』として生きるようになった。あの時の罪を戒めるために。そしてあんな過ちを繰り返さないために……

過去の記憶編、覇竜帝と少年の罪（後書き）

突然ですが一刀のプロフィールを見せたいと思います。

名前…北郷一刀

所持武器…バスターソード、合体剣、【雲龍】、【不知火】

リミットブレイク…画龍点睛、超究武神覇斬ver5、クライムハザード、連続斬、烈風波、超究武神覇斬

年齢…18

髪型…銀色の長髪

顔立ち…女っぽい

服装…剣道着、中華服、聖フランチェスカ学園の制服

異名…滅龍人

一刀がなぜ『滅龍人』と呼ばれるようになったのはドラゴン（ワイバーンなど）と人を簡単に殺してしまうからです。

今回の話は一刀の過去の話でした。どうでしたか？共感したとかこれはどうだろうと思ったことでしょう。

まあ話は変わりましたが4話の最後の方のことですが、なぜ愛紗が泣いたのかは戦前に一刀に過去のことを聞いて一刀が「もう人は殺したくない」と言ったけど、人を殺してしまい、悪魔みたいな一刀を見て悲しくなったからです。

次回は鈴々パートの後半です。お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3049h/>

真・恋姫無双－異世界の英雄と恋姫たちの三国志演義

2010年10月8日23時10分発行